

ドル高をさらに押し上げるか？米景気の力強さを確認へ～米雇用統計

2018年10月1日(月)

年初来高値を超えてドル高円安の流れが進む展開に。先週実施された米連邦公開市場委員会(FOMC)の中での参加メンバーによるプロジェクションでは経済成長見通しが前回6月時点の+2.9%から+3.2%に引き上げられるなど米景気に前向きな見通しが目立ちました。

FOMC後は調整が入る場面も見られましたが、その後ドル高が進行。ほぼ一人勝ち状態の米国へ投資資金が流入する流れが続いています。

そうした中、今週は月一のビッグイベント米雇用統計が予定されています。

前回(8月分)は非農業部門雇用者数(NFP)が予想の前月比+19.1万人を超え前月比+20.1万人と20万の大台を超える好結果を記録。

NFPと並んで好結果となったのが平均時給。

前年比+2.9%と予想の+2.7%を超えて2009年6月以来の高い伸びを記録しました。前月比では7月の+0.3%から+0.2%へ鈍化見込みが、+0.4%と伸びが強まる結果に。ひっ迫気味の労働需給にもかかわらず賃金の伸びが一息でしたが8月の数字が大きく伸びたことで米雇用市場の力強さが再認識された格好です。

失業率は3.8%へ鈍化の見込みが、7月と同じ3.9%となりました。ただ、こちらもU6失業率といわれる期間中に求職活動は行わなかったが働く意思のある人や正社員を求めながら非正規雇用に甘んじている人などを含めた失業率が7月の7.5%から7.4%へ0.1%ポイント低下し、2001年4月以来17年超ぶりの低水準を記録するなど、決して弱いものではありませんでした。

こうした状況を受けて今回9月分の数字ですが予想はNFPが+18.8万人と前回から少し伸びが鈍化見込みとなっています。もっとも、水準的には強めを維持です。失業率は3.8%へ低下見込み。前回強かった平均時給は前年比+2.8%予想と8月から0.1%ポイントの鈍化見込みも、こちらも強い水準。前月比は+0.3%見込みと、こちらも8月から0.1%ポイントの伸び鈍化見込みです。

予想前後の数字が出てくると、米雇用市場さらには米経済の堅調さ維持との見通しが広がりそう。なお、今回に関しては少し強めにしてもおかしくないとの印象を個人的に持っています。

前回の雇用者数で足を引っ張ったのが1年超ぶりの減少を記録した製造業。特に自動車部門が約5千にも減少していたことが背景にあります。ただ、自動車をはじめとする製造業は夏場の工場閉鎖(夏休みの時期に工場整備を行うため)が起こる可能性がありノイズが入りやすい項目。(ある程度季節調整されているとはいえ)今回大きく回復すると全体を押し上げる材料となる可能性があります。

また、サービス部門では前回小売業の減少が目立ちました。この部門は雇用の流動性が大きく、月ごとに増減が見られるところだけに今回上昇している可能性は十分にありそう。

一方で2か月連続で大きく増加している建設業などは少し調整の可能性も。予想からぶれやすい指標だけに上下ともに警戒する必要がありそうです。